

令和8年度 弟子屈町立川湯小学校学校経営の方針

I はじめに～教育界のながれ～

○北海道が目指す教育の基本理念

自立～自然豊かな北の大地で、世界を見つめ、自立の精神にあふれ、自らの夢に挑戦し、
実現していく人を育む

共生～ふるさとへの誇りと愛着を持ち、これからの社会に貢献し、共に支え合う人を育む
(北海道教育推進計画 令和5年度～令和9年度)

施 策

北海道が目指す「自立」と「共生」の基本理念を実現するため、3つの施策を柱として設定

「可能性を引き出す教育の推進」 (柱1)

「質を高める環境の確立」 (柱2)

「地域と歩む教育の実現」 (柱3)

○釧路管内教育推進の重点項目

「GREATE 一つくる一を軸とした教育の推進」

重点Ⅰ 自立 学びを、子どもとつくる

1人1台端末等による学習支援の充実と、対話的・協働的な学習活動の充実を一体的に推進し、主体的に学び調整しながら思考を深める学習環境の構築を図ることを通して、児童生徒一人一人の可能性を引き出す教育の推進を目指す。

- ① 1人1台端末等を活用した「学びの主体的な調整」の充実
- ② 承認を土台とした「安心して挑戦できる学び」の充実

重点Ⅱ 共生 安心して挑戦できる、学校をつくる

心理的安全性を重視した学習環境や生活環境づくりと、教職員の働き方改革や校内支援体制の充実を一体的に推進することを通して、児童生徒が安心して学びに挑戦できる情景を整備するとともに、持続可能で信頼される学校づくりを目指す。

- ① 心理的安全性を重視した学習環境と生活環境づくり
- ② 教職員が子どもと向き合う時間を確保する体制づくり

重点Ⅲ 挑戦 学びから、未来をつくる

地域社会を学びと、社会参画の機会を一体的に充実させることを通して、誰もが地域の一員として自らの未来と生き方を構想できる教育環境の構築を目指す。

- ① 協働性を生かした「地域探究」の充実
- ② 地域社会への参画を通じたキャリア形成の推進
- ③ 社会教育を通じた持続的な地域コミュニティの基盤形成

Ⅱ 令和8年度の学校経営

弟子屈町民憲章

わたしたちは、美しい摩周湖と、すばらしい大自然のなかに輝かしい未来をみつめる弟子屈の町民です。わたしたちは、祖先の築いた開拓の偉業をうけつぎ、責任と誇りをもって、明るく住みよい郷土を建設するために、この憲章を定めます。

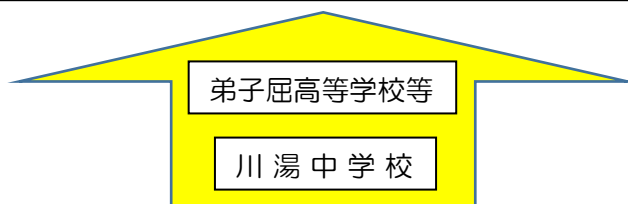
1. 元気で働き、産業を高め、豊かなまちをつくりましょう。
2. きまりを守り、明るく楽しいまちをつくりましょう。
3. すぐれた自然を大切に、美しい観光のまちをつくりましょう。
4. たがいになかよくたすけ合い、しあわせなまちをつくりましょう。
5. みんなで学び、文化の香り高い、平和なまちをつくりましょう。



弟子屈教育のめざす姿

学校、過程、地域社会が連携し、ふるさとを創る人を育む

弟子屈町教育推進計画（令和5年度～令和9年度）



1. 川湯小学校 教育目標

児童の創造性を開発し、自己を変革していける子どもを育てる

- ◇意欲的で、実行力のある子どもを育成する
- ◇自主性に富み、知性の高い子どもを育成する
- ◇心身共に健康で、思いやりのある子どもを育成する
- ◇責任感の強い、進んで働く子どもを育成する

2. 児童のめあて 《本校がめざす子ども像》

やる気をもってがんばり、常に思いやりの心をもつ子ども

- ◇あかるく ～自ら進んで行動し、誰にでも挨拶できる子～
- ◇かしく ～基礎的な知識を身につけ、自ら考え、主体的に課題に取り組む子～
- ◇なかよく ～互いに認め合い、思いやりの心をもって接する子～
- ◇たくましく～心身の健康をめざして粘り強く取り組む子～

3. めざす学校像

- ◇子どもにとって ～ 安心して通い、楽しく喜びのある学校
- ◇家庭・地域にとって ～ 信頼のある開かれた学校
- ◇教職員にとって ～ 心理的安全性が保たれ、働きがいのある学校

Ⅲ 学校経営の基本理念

義務教育の目的は、人間尊重の精神に基づき、人格の完成を目指し、社会の形成者としての基本的資質を育成することである。子どもがやがて社会へと巣立ち、自立した人生を歩み出すとき、私たち全ての教職員は、その人生が心豊かで幸せであることを願わずにいられない。

変化の激しい社会に対応するだけでなく、変化を創り出す未来社会の形成者として必要な資質・能力を身に付けていくために、義務教育の責務は大きく、その基礎を培う小学校教職員の使命は極めて大きい。

令和の教育は多様性を前提としており、子ども一人一人の特性や興味を尊重し、「自分らしさ」を育むことに比重が置かれるようになった。対話や探究、情報活用能力を重視した教育活動であり、子どもたちが自ら考え、行動できることを目指している。それでは、これまでの教育はもう必要ないのだろうか。私は、決してそう思わない。「目を見てあいさつをする」「時間をしっかりと守る」「返事をする」「人に迷惑をかけない」「人の話を最後までしっかりと聴く」等、このような人として生きていくために必要な「基本的な生活習慣」や「周りの人への配慮や優しさ」は、子どもたちにとって現在も、そしてこれからも必要不可欠な力である。多様性が尊重されるのは理解するが、画一性＝悪い事と捉えるべきではない。画一的な基準やルールがなければ、社会や学校の秩序が保たれない。“不易と流行”という言葉があるが、「普遍的な価値観」と「変わって良くなること」があり、教育においてもこの2つのバランスを保つことが大切である。

川湯小学校の校長として、ふるさと弟子屈に愛着をもち、将来本町を担う子どもの育成に努めることが、本校に課せられた使命だと考える。今後迎えるであろう変化の激しい不確実な社会を見据え、学びを通じて自分の人生の舵取りをし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育むことを意識して学校経営にあたることで、本校の大きな役割と捉えることができる。このような立場から、次の3点を学校経営の中核に据えた教育活動を推進する。

(1) 基本的な生活習慣の定着

挨拶や返事は、人間関係を築いていくためのベースとなるものであり、社会的な営みの基本的な生活習慣の一つである。相手を意識した気持ちのよい挨拶や返事が自然と飛び交う環境を整えることは、お互いに心地よく学習・生活を送るために必要不可欠である。

(2) 日常の授業の充実

わかる喜びを味わうことは、子どもたちの学びへの意欲を高め、自ら行った活動の成果を得ることは、達成感を与えるとともに次への活動に向けた原動力（エネルギー）に繋がる。このような学びの連続を意識し、大切にしたい授業の改善を重ねることが、日々の授業を支える源となる。子どもたちに「学ぶ意義」を実感させるためには、まずは教えている内容の意義を教員自身が深く理解する必要がある。また、「授業力」に加えて児童理解や合理的な配慮など、教職員に求められる資質・能力も大きいものがある。教育公務員として、子どもの資質能力向上に寄与するため、教職員の積極的な研鑽を奨励していく。

(3) 人としてあたりまえと思える心（利他の心）の育成

利他の心は、自己犠牲と考える人がいるかもしれないが、私が思っている利他の心とは、自分自身もその“利他”の中には含まれているということです。自分の幸せのために他の人を大切にすることであり、「今の行いは誰かのためになっているのか。」「他の人にとってよかれ」と意識して行動することが、周りの友達からの信頼も得ることとなり、自然と自分も幸せになる事だと考える。素直な心と感謝する気持ちをもった子どもの育成を目指す。

V 経営の7つの方針

- 1 各領域の調和が図られ、常に充実した教育実践ができる学校
 - *学習指導要領を踏まえた教育課程を実践し、検証する
 - *ICT環境を活用し、授業の充実を図る
 - *保育園、中学校との連携し、情報交流を図る～架け橋期カリキュラム（スタートカリキュラム）の推進及び整理と視える化～
- 2 望ましい人間関係を育てる生徒指導と道徳的实践力を高める学校
 - *よりよい人間関係構築へ向けた「特別の教科道徳」の実践と評価に努める
- 3 健康増進と安全保持に配慮した生命の息吹を感じさせる学校
 - *「生活リズムチェックシート」を活用し、家庭と連携を図りながら、子どもの基本的な生活習慣の確立に努める
 - *熱中症対策及びアレルギー対策の徹底を図り、子どもたちの安全保持に努める
- 4 目標の具現化の手立てがなされ、一体となって取り組む学校
 - *PDCAによる中短期目標設定と実践、協働体制の構築に努める
 - *学校評価の結果を受けた具体的取組内容の精選を行う
- 5 教育環境の整備・充実に努める美しい学校
 - *校舎内環境、校舎外環境、農園、花壇、ICT環境などの整備に努める
- 6 教職員が情熱と責任を持ち、尊敬と信頼の絆で結ばれた温もりのある学校
 - *校務の効率化を図り、教員が本来担うべき業務に専念できる環境の整備に努める
 - *各々の持ち味を生かした学校経営への参画を進める
- 7 家庭、地域と連携し、信頼と期待に応える学校
 - *PTA活動の推進、地域活動への協力・参加・交流を進める
 - *学校だより、学級だより、HP等を活用し、積極的で的確な情報発信に努める
 - *コミュニティースクールとしての活動充実に努める

VI 経営の重点 ～笑顔がひびきあう川湯小学校の創造～

1 重点目標

子どもたちに「学ぶ意義」を実感させるためには、まずは教えている内容の意義を教員自身が深く理解する必要がある。子どもを育てるための近道はない。毎日営まれる初等教育では、1単位時間45分の授業を学習指導要領を根幹に据えて、あたり前のことをしっかりと丁寧に6年間積み上げていくことが重要である。「授業力」に加えて児童理解や合理的な配慮など、教職員に求められる資質・能力も大きいものがある。学校経営においては、今ある子どもたちの姿を的確に把握し、課題を具体化し、教職員と共通理解を図り、方向性を定めて改善する。教職員が日々の学習の中で、「見えないものを見ようとする」「聞こえないものを聞こうとする」姿勢をもって、子どもたちの姿を捉える集団であってほしい。教育公務員として、子どもの資質能力向上に寄与するため、教職員の積極的な研鑽を奨励していく。また、子どもたちにも「自分から」主体的に行動することを求める。この川湯小学校に通う一人一人の子どもが、『安全に安心して笑顔で学び、生涯に渡って、ふるさと川湯』をこよなく愛することができる子どもに育てていく学校を創り上げていく。

(1) 授業改善

・個人研修

自らの資質能力の向上は授業者として必要条件である。自らの教育観を磨き、教職員の一人としてともに高まっていけるよう、自ら課題を設定し、学び続ける教職員として業務を行う。

・校内研修

次に示す研究主題・副主題を設定して授業改善を図る。

研究主題 : 「分かった」「できた」がえられる子どもの育成

副主題 : ～主体的な学びに向けた授業・実践の改善を通して～

・UD精神のある授業づくりの推進

教育の中でのユニバーサルデザインは、困り感を有する児童にとっては「ないと困る支援」である。また、その他の児童にとっては「あると便利で役に立つ支援」であり、授業においては混乱やつまずきを減らし、学習効果をより高める。授業づくりにおいては、指導の工夫を全体に行い、個々の特性に応じた支援を講じることが必要である。

本校の子どもの実態は、普通学級在籍の子は15名で、特別支援学級に在籍する子どもは8名の合計23名となる。ただ、普通学級在籍の中にも困り感を持っている子が多数おり、在籍児童の半数以上となる。このことからUD(ユニバーサルデザイン)の考え方を日常の学びや生活にいかした取り組みを行っていることが重要である。

(2) 全職員一丸となって子どもたちの成長をサポートする学校

全校児童は23名の小規模校であり、学級を尊重することは大切であるが、自分の学級ではなくても川湯小学校という大きなまとまりで捉える。子どもたち一人一人の成長に川湯小学校の子どもたち一人一人の成長を全職員でサポートしていこうとする意識をもった教職員集団でありたい。

(3) 子どもを主語とした教育活動

子どもを主語とした教育活動とは、その活動や取り組みが子どもたちにとってどうか、学校にとってどうか、そして子どもたちにどのような力がつくのかを考えてほしいと思う。迷ったときの判断基準は子どもたちであり、教師がやりたいからとか、こっちの方が楽だから等と教師が主語にならないような教育活動にしていきたい。

(4) 保・小・中連携

昨年度同様に小中連携を推し進めながら、保育園とも連携を進め、架け橋期カリキュラムの推進を図る。今年度は、保・小・中のつながりと見える化を図り、川湯地区の子どもたちの健全育成に努める。

(5) 参画意識を高く待った教職員集団

年齢に関係なく、全職員が学校をよくするために前向きな改善策を提案できる雰囲気を作り、全職員が意識を高くもった教職員集団を目指す。

(6) 開校100周年記念事業の実施

保護者・地域の方々にもご支援いただきながら、開校100周年記念式典事業を成功に導くとともに、児童には川湯小学校が誕生してから今年で百周年を迎えることを理解させみんなで御祝いする心を育成する。ふるさと川湯について学習したことを記念式典において発表していく機会を設ける。

2 川湯小学校の子どもにつけたい力 (自己決定、自己表現、自己有用感、自律)

○**自己決定**とは、子どもたちが自分で決断し、それが成功に繋がった時、自分の力を実感し、次の挑戦にも自信を持って取り組むことができると考える。先生方には、ぜひ自己決定する場面を意図的に設定していただきたいと考えます。

○**自己表現**とは、自分の思いや感情、考えを他者に伝えることを言います。自分が考えていることや思っていること、感じていることなどを伝えることは、コミュニケーションの本質です。その手段は様々で、言語表現から非言語的なボディランゲージや絵画や音楽などの芸術活動などもその一つです。これらを使って自分を表現し、他者に伝え理解されることで、自己肯定感や安心感などを得ることができると考えます。

○**自己有用感**とは、自分が有用だと思える感情のことで、自分の存在が周りの人に役立っている。または、貢献していると認識できるときに自己有用感が育つと考えます。(自己有用感自己評価だけで良いが、自分に対する他者評価が中心。)つまり、自己有用感を獲得することが自尊感情にもつながっていくと考えます。

※褒めると認めるの違い

一般的に大人が「褒める」ときは、大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように感じます。それに対して「認める」は、子どもの水準で「認められたい」のだと思います。子どもなりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のだと思います。だから、自分がさほど努力していないことを「皆さん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても嬉しくないし、励みにもならないのではないかと思います。ですから、子どもの実際の行動などと向き合いながら指導していくことが大切だと考えます。

○**自律**とは、自分で自分の行動や考えにきまりをつけて、それにふさわしい行動をするということです。もう少し分かりやすく言うと「自分で考え、判断し、決定し、行動すること」だと考えることができます。一見すると大人でも難しいことと思われてしまいましたが、私が考えている「自律」は、これまでの経験から子ども自身がその時点でいかに考えて判断し、その事柄に関して自己決定を行い、自分の周りをよくするために行動できるかだと考えています。

つまり、知見(これまでの軽々に置ける根拠等に基づく理解)を使い、その時点でその課題を解決するために考え、収集した情報を基に判断をし、自己の責任の上で決定し、目の前の課題を解決するために行動することだと考えます。その時点でのそれぞれの知見ですから、当然失敗もあると考えられます。大切なのは、成功できたかどうかではなく、課題を解決できたかどうかです。失敗したか成功したかの成否でとらえるならば、一度で結果が出てしまいますが、課題を解決できたかどうかですから、失敗したら仮説(知見)をかえて何度でも挑戦すればいいのです。子どもたちに「自律」の力を身につけさせるには、日常的な学びにもこのような姿勢が求められます。自律の力は課題を解決すればするほど身につけていくことになります。

(12歳の子ども像 初等教育修了時)

やる気をもってがんばり、常に思いやりの心をもつ子

(15歳の子ども像 中等教育修了時)

自ら考え判断し、行動できる生徒